

最優秀作品

「妻が乳がんになったとき」

武田 浩一（たけだ・こういち）

53歳／会社員／長野県

2004年4月11日の長野マラソン、最高の笑顔でゴールした妻が本当に乳がんなんだろうか？ 4日後、乳がんの除去手術は行われた。悪い夢を見ているような感じだった。術後に主治医から除去した部位を見せられた時、これは現実と認識せざるを得なかった。そして妻に面会したとき、私の方が泣いてしまった。

その後の抗がん剤治療は体力的にも、精神的にも辛いことの連続だったと思う。4回の抗がん剤投与が、体力的にどれほどのものか私には見当がつかない。しかし、40半ばにして女性の象徴でもある乳房を失ったうえ、副作用で髪が抜け落ちていく様を間近に見ると、その精神的ダメージは痛いほど伝わってきた。私たち夫婦を、いろいろな面から支えてくれた多くの方々に感謝の気持ちでいっぱいである。同居の両親と娘は家族として協力を惜しまなかった。妻が元気になったことを喜びながら2年前に他界した親父・毎朝、その墓前で『俺たちを見守ってくれ。』と手を合わせるのが私の日課である。

妻が勤める会社の社長や上司、同僚の皆さんにもお世話になった。社長ご自身から『しっかり治して出てきなさい。いつまでも待っています。』と温かいお言葉、それに過分な見舞金まで頂戴した。妻は一日でも早く社会復帰して会社に恩返しするんだという思いを強くしたはず。物心両面から支えていただいたおかげで、また以前の職場で元気に仕事ができるようになった。小さいながらも長野県内では知名度も高い超優良企業である。

そして走る仲間是有り難かった。妻は仲間と一緒に写っている長野マラソンの写真を枕元に置いて、またいつかフルマラソンを走りたいと思っていた。お見舞いに来てくれた走友会メンバーとは、いつも走ること的话题で盛り上がった。8月、仲間と一緒に諏訪湖の花火を走って見に行けるまでに回復した。去年は念願だった東京国際女子マラソンを走らせてもらった。そして手術から5年が経過して、50歳となって迎えた今年の長野マラソン、年代別で3位入賞を果たすまでに復活してきた。明らかに病後の方が強くなった。

乳がんは急増しているという。この病氣と闘う患者さんたちの苦悩は、実際に傷みを経験した者でないとわからない気がする。妻には悩んでいる人たちを励まし、更には夢や希望を持っていただけるように、これからも走り続けて欲しいと思っている。